

国指定史跡

鎌刃城跡

番場は古くから東山道(中山道)の要衝に位置しており、鎌倉時代には西遷御家人土肥氏が箕浦荘の地頭に補任されています。土肥氏は番場に居館を構え、その跡は現在「どの やしき 殿屋敷」と呼ばれています。しかし、戦国時代になると番場の領主は土肥氏から堀氏に代わり鎌刃城が築かれます。『今井軍記』によると文明4年(1472)に今井秀遠が堀次郎左衛門尉の立て籠もる鎌刃城を攻めており、この頃にはすでに堀氏の城として機能していたことがわかります。天文7年(1538)には六角定頼が湖北に侵攻し、鎌刃城、太尾山城、磯山城、佐和山城がことごとく落城しています。『鳴記録』によると当時の鎌刃城主堀石見は京極高広方に属していたことが知られ、当時の坂田南郡は六角氏と浅井氏の抗争に加え湖北の守護京極氏政権も維持されているという、複雑に錯綜した地域であったようです。元龜元年(1570)、浅井長政が織田信長に叛旗をひるがえしますが、鎌刃城主堀秀村は木下藤吉郎の説得によって織田方に付きます。信長は戦時下の湖北支配を堀氏に任せ、一説には坂田郡で6万石を賜ったといわれています。秀村の発給した文書は坂田郡に止まらず、浅井郡内の竹生島や菅浦にまでおよんでいます。こうして鎌刃城は単なる境目の城というだけではなく、戦国武将・堀氏の居城として湖北支配の拠点ともなりました。

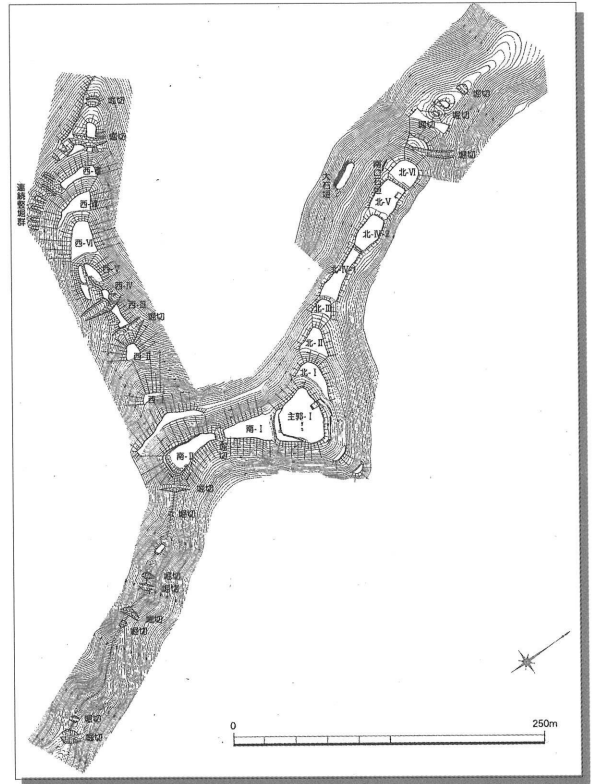
しかし、『当代記』によると天正3年(1574)に堀氏は突然改易され、これにともない鎌刃城も廃されたようです。



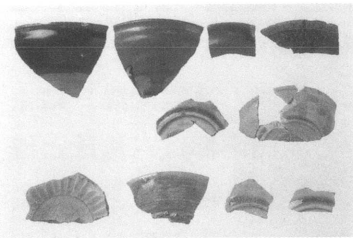
鎌刃城跡の構造

鎌刃城跡は標高384mの山頂に築かれた典型的な戦国時代の山城です。その構造は主郭と副郭を山頂に配し、主郭より北西に派生する尾根上に7ヶ所の曲輪を連ね、その先端は巨大な三重の堀切によって処理しています。また、副郭の西に派生する尾根上にも7ヶ所の曲輪を連ね、その先端は二重の堀切によって処理しています。この西方尾根上遺構の先端南西部には畝状空堀群がめぐっており注目されます。

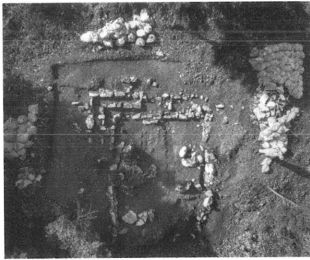
副郭の南東は城域よりも高所に尾根が続くため8本にのぼる堀切を設けて尾根筋を遮断しています。この尾根は急峻にそそり立ち、そこはまさに鎌の刃を思わせます。なお、この8本の堀切の最も外方の堀切の南崖下には青龍の滝があり、その滝口には城内に水を引き入れた水の手遺構も残されています。



鎌刃城跡縄張図



出土遺物



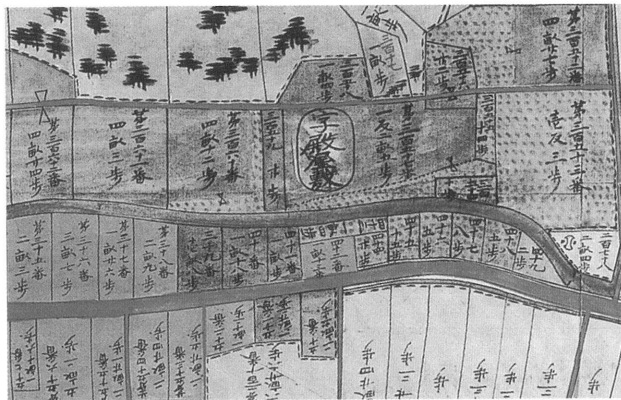
北郭虎口



主郭虎口



殿屋敷遺跡



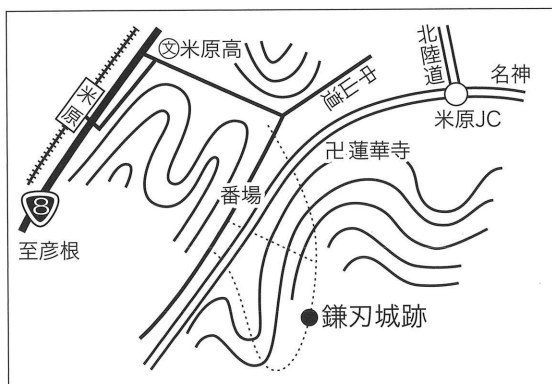
番場村地券取調総絵図 (明治6年)

殿屋敷遺跡

発掘調査で、掘立柱建物3棟と9基の井戸跡、溝などが見つかりました。これらは、大きく13世紀末～15世紀初頭のもので、さらに3つの時期に分けられます。

出土品は、土師器・瓦質土器・国産陶器・輸入陶磁器・木製品・石製品・金属製品などがあり、全体のなかで輸入青磁が占める割合が、当時の一般の集落遺跡と比較すると大きいようです。また、「物差し」が出土しているのも注目されます。

東山道に接した流通拠点の番場は、一般農村集落よりもきわめて町的、都市的な性格だったようです。発見された遺構については、調査地南方の土肥氏館跡の関連施設や、土肥氏の家臣団クラスの屋敷、地域の有力者や宿場施設などが想定されています。



鎌刃城跡

- 所在地 滋賀県米原市番場
- アクセス JR東海道線米原駅下車、湖国バスで「番場」下車。徒歩約45分。

米原市教育委員会

滋賀県米原市顔戸281-1 近江はにわ館内
TEL.0749-52-8025 FAX.0749-52-8177
平成22年度 埋蔵文化財活用事業